

「証言 四日市公害の記録」について

三重県四日市市環境部環境保全課

■制作の目的

毎月「四」のつく日に市が立つ、中世からの庶民生活が^{まち}市の名の由来となった四日市。自然の恵み豊かな伊勢湾と鈴鹿山脈を擁するこのまちで昭和30年代半ばに発生した石油化学コンビントを発生源とする産業公害は、地域住民の健康と生活環境に重大な影響を及ぼし、日本の四大公害の1つ・四日市公害として知られるようになりました。この問題に対して、市民や企業、研究機関や行政が一体となって大気汚染測定や硫黄酸化物の総量規制、医療費負担などに取り組んだ結果、四日市市域の環境は年々改善されてきました。

さて、公害裁判から30年余りが経ちます。しかし、今も約500人が公害患者として暮らしておられます。また、市民や学識経験者などの四日市公害への取り組みについては書籍等の記録があるものの、映像として残っているものはわずかしきありません。環境問題の原点である四日市公害を風化させず後世に伝えるため、市では『四日市公害を語るビデオ』全6巻を、3年がかりで制作しました。

第1巻「公害被害者 野田之一さん」19分

第2巻「学識経験者の取組み」30分

第3巻「市民運動のもたらしたもの」21分

第4巻「企業の取組み」25分

第5巻「行政の取組み」35分

第6巻「総集編」41分

■ビデオが伝えるもの

いずれも、環境改善に努めてこられた人の経験談や当時の資料をまとめたものです。昨年1月に開設した「四日市市公害資料室」での活用もあって、小中学生や市民はもちろん、研究者や団体を中心に鑑賞の輪が広がっています。団体の中には、担当者の異動時に必ず視聴すべき

資料として引き継がれているところもあるようで、こんな感想が寄せられています。

「昔の人が戦ってくれたから今の四日市がある事を忘れてはいけない。普通に生活できるのはおじいさんおばあさんのおかげだから大事にしないといけないと思った」

「住民一人一人の力で市・県・国を動かすことは、本当に大変なことだと思う」

「公害検診など患者のための対応は長く続くことがわかりました」

「問題は解決したわけではない。今も苦しんでいる人がいるのだから、私たちにできることは何があるのか、もっと考えていく必要があると思う」

■負の遺産を礎に、未来へ

四日市公害の経験を負の遺産として世界各地の環境問題に貢献するため、官民の協力により設立された（財）国際環境技術移転研究センター（ICETT）が、昨年15周年を迎えました。72カ国・地域から約1,800人の研修生を受け入れてきたICETTでも、産業公害の実態を知るためにこのビデオが活用されています。「四日市公害を繰り返さないために」を合言葉に、今日も研修生は自国に必要な環境技術を学んでいます。

ところで残念なことに、今市内では国内最大級の産業廃棄物不法投棄問題が起きています。紙片も尽き、詳細は省きますが、かつて四日市公害の患者はこう言いました。「公害というものは自然環境を破壊したらあらゆる生物が生きてはいけいないのだから、何はともあれ、貧乏していても、未来へ私のふるさとを良かったと自慢ができるような行いをしてほしい」。この言葉に恥じない結論が出せるか否か、未来に向けて関係機関の総力をあげた“平成の判断”が問われています。